

# 重度・重複障害児のアイコンタクトの促進

—やりとり遊びを通して—

○児山隆史  
(鳥取県立倉吉養護学校)

樋口和彦  
(島根大学)

三島修治  
(島根大学)

小川巖  
(島根大学)

KEY WORDS: 重度・重複障害児、アイコンタクト、やりとり遊び

## I. 目的

人と人が顔を合わせる（アイコンタクト様のかかわりをとる）ことは、人間の発達上欠かすことができない重要なコミュニケーションの基盤である（小柳津，2011）。障害がある子どもにはアイコンタクトを伴った発達支援が認知発達を高める上で非常に重要である（森崎ら，2004）。

しかし、重度・重複障害児の場合は、アイコンタクトが成立しにくい場合が多い。小柳津（2011）は、指導者側が積極的に視線を合わせることで、子どもと「つながる感じ」が高まっていき、子ども達も人とつながることの楽しさ、必要性を体験的に身につけていくとした。重度・重複障害児とかかわる大人が視線を合わせることを意識する事が、アイコンタクトを促進する可能性を示唆している。

やりとり遊びは、大人が子どもに視線を合わせてやりとりする遊びであり、繰り返す遊びの流れの中で、誰が働きかけているのかが理解しやすい。障害が重い子どもに対しては、コミュニケーション指導の有効な方法である（吉川，2008）。本研究では、アイコンタクトに課題がある重度・重複障害児を対象として、やりとり遊びを通して、著者へのアイコンタクトを促進することを目的とする。

## II. 方法

1 対象生徒：A。特別支援学校（肢体不自由）に在籍する中学部1年生の男児。肢体不自由と知的障害を併せ有している。遠城寺式乳幼児分析的発達検査では、移動運動0：1、手の運動0：1、基本的習慣0：1、対人関係0：2、発語0：2、言語理解0：5である。Aは、痰が喉にからみやすい。痰の吸引や排痰姿勢をとることで、学校生活を送っている。一方、慣れた友達や身近な教員とのやりとりを好む。友達が近づいてくると、友達に向けて手を伸ばそうとする。目の前に物を提示すると、その物を注視・追視する。大人に視線を合わせて応じたり、働きかけたりするアイコンタクトは難しい。

2 観察場所と観察期間：B 特別支援学校（肢体不自由）の一教室。観察期間は、2017年2月～2017年3月。観察回数は8回であった。

3 手続き：Aの痰の喀出を促せる腹臥位支援具に膝立ちをした状態でおこなった。毎朝決まった時刻に、Aの視線の先に著者の顔があるように対面してやりとり遊び「一本橋こちょこちょ」を行った。

(1) 「一本橋こちょこちょ」をすることを告げる。Aの手の平から肩まで「一本橋こちょこちょ」のフレーズに合わせて、著者の指で触刺激を与える。

(2) Aが著者の目を見る（アイコンタクト）行為の出現を待ってから、Aが好む頭部へのくすぐりを行うようにした（Fig. 1 参照）。

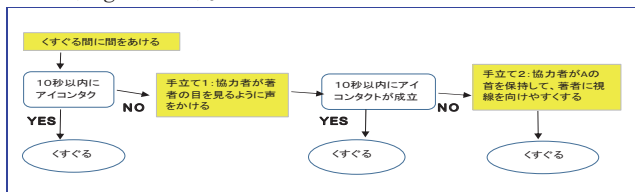


Fig. 1 アイコンタクトを引き出す手立て

4 記録の整理と分析：Aと著者のかかわりの様子をビデオカメラで撮影し、アイコンタクトの生起状況を分析した。

## III. 結果

Aのアイコンタクトの生起状況をTable1に示す。

Table 1 アイコンタクトの生起状況

試行	手立てなし	手立て1	手立て2
①	×	×	×
②	×	×	×
③	×	○	—
④	×	×	○
⑤	×	×	○
⑥	○	—	—
⑦	○	—	—
⑧	×	×	○

①②の時、手立て2でもAは著者と反対側に目を動かしたためにアイコンタクトは成立しなかった。③では、「著者の目をみてごらん」の声掛けで、目を動かし著者とアイコンタクトが成立した。④⑤では、手立て1の時点で目を動かそうとしたが、著者とは反対方向に動いた。⑥では、顔を動かした結果、著者とアイコンタクトが成立した。⑦では、瞬きをした後、目を動かしアイコンタクトが成立した。⑧では、手立て1で、目を動かそうとしたが、アイコンタクト成立にいたらなかった。

## IV. 考察

森崎（2004）らは、アイコンタクトにも「①方向性、②焦点の一致感、③強さ、④持続性」の4つの力が必要であるとされている。小柳津（2009）は、4つの力には「方向性→持続性→焦点の一致感→強さ」の発達の順序性があるとした。Aは、著者を見ようとするものの顔が反対の方向を向いてしまうことがあったことから「方向性」に向かう段階であると考えられる。原始反射が消失していないAの場合、それを抑制しつつ「方向性」の段階にアプローチする姿勢やかかわり方について、さらに検討が必要となるであろう。

また、⑥⑦試行で手立てなしで成立したアイコンタクトが⑧試行では、手立て2が必要であった。この結果は、Aの体調（呼吸状態、覚醒度）の影響が強かったと考えられる。重度・重複障害児の場合、体調を整えること様々な活動の前提になること示唆する結果といえるだろう。

## V. 文献

小柳津和博（2001）重度・重複障害児における身体運動発達と視覚認知発達との関連性。障害者教育・福祉学研究，第7巻，1-8。

森崎博志（2004）自閉的な子どもへの身体を介した関わりの意義：発達の視点からの理論的考察。リハビリテーション心理学研究，32，2，49-62。

吉川知夫（2008）重度・重複障害児の共同注意行動と要求伝達行動の高次化に関する指導。重度・重複障害児における共同注意関連行動と目標設定及び学習評価のための学習到達度チェックリストの開発，53-60。

(KOYAMA Takashi, HIGUCHI Kazuhiko, MISHIMA Shuji, OGAWA Iwao)